

II-1-6 芸術科

(1) 研究仮説

多くの生徒が苦手としているリズムを、ボディパーカッションのグループ活動を通して学び合いを行えば、リズムへの理解が深まるであろう。

(2) 実践

- ア 実施日時 4月下旬から5月下旬
イ 実施場所 音楽教室
ウ 参加生徒 芸術（音楽Ⅰ）選択生徒 D、E、F組 120名
エ 実施内容（8時間扱い）

	内 容	配慮事項
第1時	グループ作成とパート決め	○読譜力のある生徒が均等にグループ及びパートに入るように指示する。
第2時 ～ 第7時	グループ練習	○リズムの教え方は生徒の伝え方に任せ、できるだけ見守る。 ○曲が通せるようになってきたらテンポの速い曲と一緒に演奏して、合わせることの楽しさを味わわせる。 ○強弱の表現方法を提示する。 ○メトロノームの使用については教師側から提示するのではなく、グループからの要求を待つ。
第8時	グループ発表	○全てのグループの発表を見られるようにグループ配置をする。

(3) 評価

- ア 参加生徒の感想

【リズムを教えることで工夫したことや学んだこと】

- 人に教えることは自分自身の練習にもなる。
- 自分が理解していても、他の人が理解できているとは限らないという当たり前のことに気付いた。しかし、それに気づきながら練習するのは楽しかった。
- お互いに教えあうことで一緒に技術を高め合うことができた。
- 自分のリズム感的なことを言語化して伝えることが一番難しかったが、結果的に自分の力にも繋がることを学んだ。
- 教える作業を繰り返すことで、自分の理解が深まった。
- 教えた時に理解してもらえない時にどう教えるか悩み、言葉にして覚えてもらった。
- りんごが半分とか、絵を描いて教えた。相手に何か教えることは音楽以外でも難しい。

【発表練習に取り組んだ気付き】

- 楽譜を見ながら演奏するのはとても難易度が高く初めは出来なかったが、小節の最後を記憶して目線を次の小節へという風に回を重ねるごとに自分なりの工夫を見つけた。

- 発表というひとつの目標に向かってグループで協力したことで、自分だけでは絶対に分からなかったコツを教えてもらったりモチベーションを保って練習をすることができ、リズムへの理解が深まった。
- みんなでひとつになって音楽を作り上げることはすごく楽しいし、いいことだと思った。音楽に限らず友達と協力することは大切だと思った。
- みんなでどのような工夫をするのか、難しいリズムのところはどうしたら覚えやすいかなどをお互いに話し合いながら練習することでグループの絆が深まった。
- 目立つ部分とそうではない部分で手拍子の仕方を変えたりする工夫ができた。みんなで表現を工夫するのが楽しかった。
- 演奏しながらお互いの音を聞いて、どこがどうだったかを共有して次に繋げるようにしたから発表でベストを尽くすことができた。

イ 考察

今回のグループ活動における「自分の立場」は図1の通りである。楽譜を読むために一番難しいことが「リズム」と答えた生徒は、教わる立場の生徒の78.2%である。演奏をする上で読譜をすることは最低限必要な能力であり、音楽科の目標である「生涯にわたって音楽を愛好する心情を育てる」を実現するためにも読譜力を身に付けることが大切と考える。読譜にはリズムを理解することと、音名を覚えることが必要だが、音名に関しては本校生は理解している生徒が多い。そこで苦手意識の強いリズムを、ボディパーカッションの合奏を通してグループで学び合いを行えば理解が深まるのではないかと考えた。図1の「教わる立場」の生徒が発表後にリズムへの理解がどのくらい深まったかを表したものが図2であり、リズムへの理解が深まった生徒が87%である。グループ練習の過程では、「どうしても分かってもらえないか」「なぜ合わないのか」「なぜできないのか」という「問い」をそれぞれが抱え、解決策をグループで考え実践する中で、楽しみながらリズムを学んでいくことができたことが立証された。

図1

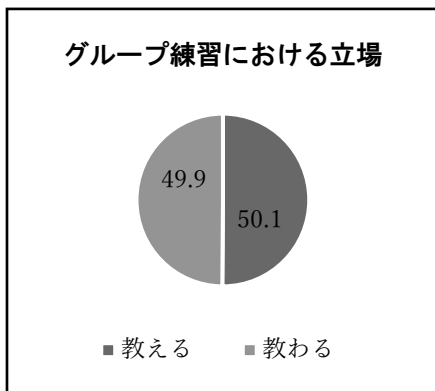
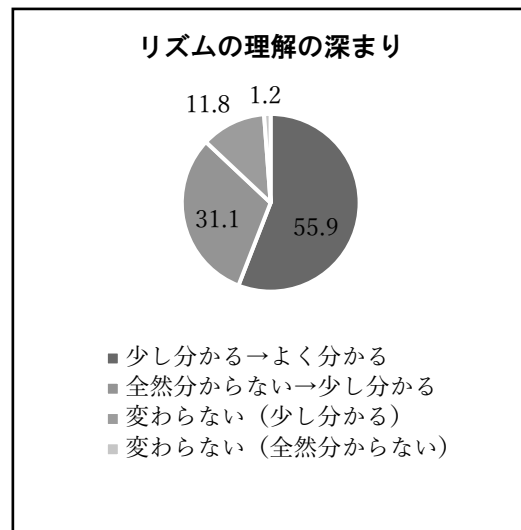


図2



ウ 今後の課題

器楽や歌唱・鑑賞の授業は「なぜ」の宝庫である。「どうしてこの音は出ないのか」「どうして合わないのか」「どうやって吹くのか」「どうしたらできるか」「どうして美しく聴こえるのか」などの「問い」が常に生み出され、能動的に解決できる授業を模索しかなければならない。リズムの理解は音楽を楽しむための入り口にすぎないが、楽譜に対する苦手意識を少なくしながら、合奏や歌唱などの表現の楽しさ、鑑賞の奥深さを味わう中で、生涯にわたって音楽を楽しめる土台を養っていきたい。